

社会文化的要因と摂食障害の関連

— 摂食障害者との半構造化面接より —

岩 田 伸太郎

摂食障害の社会的要因については、現代社会とくに欧米や日本といった先進諸国において、痩せていることをよしとして礼賛する文化、すなわちやせ志向文化に言及されることが多い。特に、やせ志向文化を担うエージェント、たとえばマスメディアや母親・友人に関する検討が盛んに行われている。その一方で、ジェンダーの知見や社会学の立場からやせ志向文化を再考している研究者もいる。彼らによれば、やせ志向文化は暗黙のうちに、理想的な痩身が幸福や成功への途であるとのメッセージを社会的圧力として我々に伝達している。そして、女性たちにやせ願望を抱かせているにも関わらず、女性たち個人にとっては、その願望がまったく個人的で純粋な性質をもつものだと認識させるようなメカニズムが働いていると指摘している。これは、摂食障害における社会文化的要因の問題性を強く唱えているものといえよう。これらの議論は、現代におけるやせ志向文化という社会文化的要因の重大性を認識しながら、やせ志向文化こそを問題視する立場と、やせ志向文化の弊害点を認めながらも、その他の要因を加味して捉えるべき立場というように異なる見解が存在することを示している。

また、摂食障害が、食行動上の不適切な行動をとるが故に、摂食障害の食に焦点をあて、食事状況から家族の関係および摂食障害の発症状況との関連を捉えた研究が多く認められる。一方で、多くの心理臨床家から、摂食障害の家族には、食事に対する強いこだわりの行動が認められるという報告がある。しかしながら、現代社会においては、マスメディアを中心として料理やグルメ、健康に関する情報が溢れんばかりに流布されている。また、摂食障害者自身が、医学・栄養学に関する高度な知識を有していることが報告されており、摂食障害が食行動上で問題を示す理由の一つとして、社会や家族における食事に対するこだわり文化が影響を及ぼしているのではないかと考えられる。すなわち、摂食障害患者が医学や栄養学に基づく知識を蓄えていったのは、単に太らないようにするためだけの知識というよりも、家族やメディアという社会化のエージェントを通じて、医学的・栄養学的によいと評価されている食事の摂取という社会規範を獲得しようとした結果、それら知識が蓄えられ、食事に関する病理を発症させたのではないかという視点からの検討が必要とされている。

本研究では、摂食障害罹患中の女子大学生2名を対象に、半構造化面接により質的に検討した。その結果、両者ともやせ志向文化の影響を強く意識的に捉えており、自らのやせ願望との関連を肯定している一方で、食事に対するこだわり文化については、その影響を強く受けていながらも、自発的な認識には十分いたっていない現状が明らかになった。また、個人要因として、自らの自尊感情や他者志向性という特徴が語られ、それら個人内の要因が文化に対する同調的態度を形成する要因となっていることが明らかとなった。摂食障害が社会文化的な影響を強く受けながらも、文化に対して同調している個人的要因を抜きにして捉えることが出来ないと示されたと言える。